様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22520238
研究課題名（和文）
近代初期英国における奉公人文学と社会的流動性との関連についての歴史的研究
研究課題名（英文）　A Historical Study of the Relationship between Servant Literature and Social Mobility in Early Modern England
研究代表者
滝川　睦（TAKIKAWA　MUTSUMU）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：90179573

研究成果の概要（和文）：近代初期英国における奉公人文学を、とくにシェイクスピア劇や同時代の演劇を基軸に据えて分析することにより、奉公人文学のジャンルおよびそれに属する作品の特質を明らかにすることだけでなく、近代初期英国の社会的変動や流動性によって生じた欲望や「場」の変容―ロンドンなどの都市に生じた「場」の狭隘化および閉鎖化―を象徴する形で、奉公人文学作品において従者や徒弟が表象されていることを歴史的視座から解明した。

研究成果の概要（英文）：This Study, especially focusing upon Shakespearean plays and his contemporary drama, not only elucidates the facets of Servant Literature in early modern England, but also historically investigates the fact that the figures of servants and apprentices in Servant Literature are representations of desire as well as the contracted and privatized “places” which the social mobility in early modern England produced.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英米文学・近代初期英国・奉公人文学・奉仕・社会的流動性・徒弟制度

１．研究開始当初の背景
以下の諸点が、研究の学術的背景・契機として存在していた。
（１）これまで主体の概念を中心に、近代初期英国文学研究がなされ、またキャノンの見直しがなされてきたが、主体の基軸を奉公人に据えたものが研究が少ないこと、（２）奉公人を主体に据えた、従来の数少ない研究においても、古代ローマ喜劇から近代初期英国インタルードにおいて表象された奉仕、奉公、そして仕事の概念を核とする奉公人文学の伝統が等閑視されてきたこと、（３）平成１８年度から２０年度まで受け入れた科学研究費補助金による研究の焦点であった近代初期英国における放浪文学と、本研究で焦点化する奉公人文学が、当時の社会的動態を映すという点で相補的関係にあること。

２．研究の目的
本研究の目的は、近代初期英国における奉公人文学と当時の社会的流動性との関連性を歴史的視座から解明することである。とくに１６世紀から１７世紀における奉公人文学というジャンルを焦点化することによって、近代初期英国文学のキャノンの見直しを行うのと同時に、そうした奉公人文学の隆盛・

衰退と、当時のロンドンなどの都市や英国周縁地域における社会構造上の変動や流動性との関連性を解明することが本研究のねらいである。

３．研究の方法

（１）近代初期英国の奉公人文学作品を分析し、そのジャンルを同定し、作品内に表象される奉仕の概念を軸に、奉公人文学の特徴をデータベース化する。（２）サトゥルヌスを称える農神祭に起源をもつ、古代ローマのプラウトゥスやテレンティウスの喜劇以降の、狡知な従者が狂言回しを行う奉公人文学の系譜を明らかにし、さらにイタリアのコメディア・デラルテの伝統と近代初期英国演劇の関連性について分析する。（３）近代初期英国における社会的変動と結びついた奉仕の概念の変遷と、同時代の奉公人文学によって表象される奉公の概念とを比較・分析し、その差異と共通性を解明する。（４）A・L・バイアなどの近代初期の歴史研究者が提出する歴史的視座と、パトリシア・フマートンなどが実践する新歴史主義批評の方法論を援用して、近代初期英国の奉公人文学と当時の社会的変動・流動性との関連を精査する。とくに近代初期英国におけるロンドンなどの都市空間の変貌や、マスターレス・マンの増加、ドメスティシティ概念の変遷と、当時の奉仕文学との関連に焦点を合わせて分析する。（５）近代初期英国における職業劇団がパトロン制度の中で構築していった奉仕の概念や、ギルドにおける徒弟制度の奉仕概念の推移、宮廷風恋愛の伝統における奉仕の概念など、同時代における奉仕概念の種種相をマッピングし、上の分析で明らかになった近代初期英国における奉仕概念の定義の補強を行う。（６）上記の分析の結果を総合して、近代初期における奉仕概念の定義に基づき、奉公人文学のジャンルの生成と発展のメカニズムを解明し、文学的表象としての奉公が、近代初期英国における社会的流動性と結びつく様態を解明する。

４．研究成果

近代初期英国における奉公人文学と社会的流動性・変動との関連性について次のような点が解明された。

（１）近代初期英国における社会的流動性や変動がロンドンなどの都市にもたらした問題は、都市空間の肥大化と生活空間の狭隘化、それに伴う中世的祝祭空間の消滅である。またそれらの空間的変貌と寄り添うような形で都市居住者の欲望が肥大化していった。近代初期ロンドンにおける社会的流動性は、都市として空間的に膨張する一方で、伝統的な祝祭空間を締め出すような形で、個々人のプライヴァシーを重視し、個々人を隔離するように壁を設け、生活空間を孤立させ、狭隘化させていった。その孤立した空間において、人のさまざまな欲望は肥大化し、やがてはそれらの欲望は「視線」に変貌し、壁を貫き通し、壁の向こう側の他者空間に侵入し、他者を支配していくことになる。

近代初期英国における社会的流動性がもたらした上記の問題と、その解決について演劇的に表象しているのが、当時の奉公人文学の筆頭に挙げられるべき、シェイクスピアの『十二夜』（１６０１年制作？）である。本劇において、中世的祝祭空間の消滅と、近代的プライヴェート空間の孤立化・狭隘化は、従者が拠って立つ「場」の変貌として描かれている。前者の祝祭空間の消滅は、オリヴィアのもとで、彼女の父親の代から従者として仕えている道化フェステが、劇中において「時代遅れである」と評されるところからも明らかである。サー・トウビーたちが繰り広げる祝祭の輪の中心にいるフェステは、執事マルヴォーリオによって表される近代の時間の速度に追いつけないのである。一方、孤立・狭隘化したプライヴェート空間は、マルヴォーリオの挙措によって生成されている。彼はそのプライヴェート空間において、階級の垣根を飛び越し、自分が伯爵になる欲望を募らせる。同時に彼は、他者のプライヴェート空間を覗きこみ、それを侵犯しようとする。従者マライアがしたためた、偽の手紙の封印を破壊するところにそうした「覗き」や、侵犯が明確に表象されている。そして本劇においては、そのような覗きや侵犯に対して、古代ローマ神話におけるアクタイオンの身に降りかかった、去勢にも匹敵する制裁が科せられるのである。

『十二夜』においては、従者シザーリオに扮し、オーシーノ公爵に仕えるヴァイオラが上の制裁を回避する視座を提示する。彼女は、中世から近代初期の演劇において存在していた「プラテア」という特権的な「場」に身を置きながら、「ロクス」おける、肥大化した欲望を抱えた登場人物たちを観察する。当時の劇においては、「ロクス」において劇的イリュージョンが生成され、「プラテア」において役者は現実の観客に語りかけ、笑いを共有することができた。ヴァイオラはこの両方の「場」に身を置くことによって、とくに「プラテア」に立ち、「ロクス」において呻吟している自分の心の内側を覗きこみ、また己の欲望の正体を正確に把握することにより、その流動性にともなって近代初期英国社会が抱えた、上記の問題を解決しているのである。さらに大団円においてヴァイオラは従者から公爵夫人となることによって、伝説上の奉公人たち―徒弟や従者の身分から市長となったサイモン・エアやディック・ホイッティントン―と同じ位相に立つ。

（２）近代初期英国の奉公人たちにとって、当時の社会的流動性がもたらした最大の脅威は、自分が「マスターレス・マン」の身分に陥ってしまうのではないかということであった。「マスターレス・マン」（masterless men）とは文字通り、「主人」（master）に仕えていない者を指しているのだが、近代初期英国においては、浮浪者、放浪者、そして物乞いをする者の謂であった。たとえば１５７２年６月２９日に公布された「浮浪者取締法および救貧法」においては「マスターレス・マン」は「土地を所有しない者」、職業組合やギルドに属して生計を立てていない者、貴顕の後ろ盾のない「剣闘士、熊使い、インタルードに出演する役者、吟遊楽人」、「曲芸師、行商人、鋳掛屋、呼び売り商人」などと並んで当局の取り締まり対象となり、捕縛された場合は、鞭打ちと、生を受けた教区への強制送還という刑罰が定められていた。囲い込みなどによって、放浪者として生まれ育った教区―「場」―を後にせざるをえなかった人々はもちろんのこと、そういった人々の都市への流入により、都市における生活や労働の「場」を失った人々も、そして家父長制度における「主人」としての父親に逆らい、家を出た子供たちもまた「マスターレス・マン」とみなされる危険性があった。

「マスターレス・マン」の身分となった従者を登場人物に布置した奉公人文学作品は、近代初期英国においてシェイクスピアの『リア王』（１６０４－０５年制作？）をはじめとして数多く存在するが、『マクベス』（１６０６年制作？）は「マスターレス・マン」を主人公に配しているという点で、そうした奉公人文学の筆頭におかれるべき作品である。

バンクォウ殺害を依頼され、その首尾を『マクベス』三幕四場の宴の席に現れ、マクベスに告げに来る「刺客１」は上で述べた「マスターレス・マン」の典型と言えよう。運命の女神に家族もろとも見放され、犬にも譬えられるような浮浪者の生活を送る「刺客１」たちは、近代初期英国社会において「浮浪者取締法および救貧法」の取り締まりの対象となる「マスターレス・マン」に他ならない。

本劇の三幕四場に登場する「マスターレス・マン」としての「刺客１」は、①バンクォウの息子フリーアンス殺害に失敗したことを告げ、宴＝戴冠式に臨むマクベスを動揺させること、②本来列席することが許されるはずのない「マスターレス・マン」が、王の祝宴に参加していること、③「だまし絵」のように、マクベスには見えて、宴に集った諸侯たちには見えない位置に立つという意味で、宴の席にやはり「だまし絵」のように出現するバンクォウの亡霊と同じ働きをしていることによって、マクベスの宴を瓦解させる大きなモメントになっている。だがしかし三幕四場に登場する刺客はそれ以上の意味をもつ。つまり、「刺客１」は「マスターレス・マン」としてこの場に登場することにより、今王冠を被っているマクベスもまた、欲望を肥大化させたあげく、ダンカン王という「主人」を失い「場」を失った従者―「マスターレス・マン」―に他ならないこと、言い換えるなら、「刺客１」はマクベスの分身であることを観客に明らかにしているのである。

なお『マクベス』、そしてリア王をはじめ大勢の「マスターレス・マン」が登場する『リア王』をも奉公人文学のジャンルに属する作品としてとらえた本研究は、今後のシェイクスピア研究および近代初期英国文学研究に新たな研究視座を提供することになると考えられる。

（３）近代初期英国における奉公人文学と古代ローマ喜劇、とくにプラウトゥスの喜劇との関連性を解明した。

古代ローマ喜劇、とりわけプラウトゥスの喜劇は、主人と奴隷の関係に焦点を合わせているという点で、奉公人文学の起源ともいうべきものであるが、これまでの近代初期英国文学研究では主人―奴隷の関係を軸にして、古代ローマ喜劇と近代初期英国の奉公人文学の関連性について考究されることがほとんどなかった。たとえば、T・W・ボールドウィンの『シィクスピア劇の五幕構造』（１９４７年）にしてもロバート・S・マイオラの『シェイクスピアと古典喜劇』（１９９４年）にしても、言葉遣いの点で古代ローマ喜劇とシェイクスピア劇と相似していることや、『ウインザーの陽気な女房たち』（１５９７－９８年制作？）におけるフォルスタッフが、プラウトゥスの劇『ほらふき兵士』の兵士ピュルゴポリュニケスにいかに似ているかに焦点を合わせており、「奉仕」の概念を軸にした主従の関係については十分に論じられていない。だがしかし、シェイクスピアの『オセロ』のような芝居は、まさにプラウトゥスの喜劇に描かれた従者―主人の関係を基軸に据えて構成されているのである。

マイケル・ニールが指摘しているように、『オセロ』（１６０３－０４年制作？）の主題は「場」（“place”）である。副官になれずに、旗手の身分に甘んずることもできない従者イアーゴーにしても、ヴェニスからキプロス島へ移動を余儀なくされたうえに、その異人種性が劇中において際立たせられてしまう主人オセロにしても、「場」を求めて劇中を彷徨していると言えよう。そして『オセロ』におけるこのような「場」の不安定性は、プラウトゥスの『ほらふき兵士』などに表象される、「場」の不安定性と結びついている。『ほらふき兵士』の二幕一場において、奴隷パラエストリオがコーラスとして登場し、観

客がほら吹き兵士の正体をすっぱ抜くところがあるが、『オセロ』冒頭における従者イアーゴーの役割は、パラエストリオと同様に主人オセロの「場」を異化し、それを土台から揺さぶり、瓦解させることである。

今後、シェイクスピアの『テンペスト』（１６１１年制作？）や『十二夜』において、古代ローマ喜劇において描かれた奉仕概念や主従関係がいかに浸透し、また書き換えられているかについてさらに精査していく。

（４）近代初期英国における家庭政治学と奉公人文学との関連性の一側面について解明した。

近代初期英国においては、１６２２年に出版されたウイリアム・グージの『家庭における役割』で説明されているように、夫と妻の関係はその役割において、主人と従者の関係と相似していながらも、その差違は明確であった。当時の奉公人文学においても、この相似と差違が明確に描かれている。たとえばシェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』(1592年制作？）においては、夫ペトルーキオと妻キャタリーナの関係は、副筋の主人ルーセンシオと従者トラーニオの関係、さらに主人ペトルーキオと従者グルーミオの関係とパラレルでありながらも、夫―妻と、主人―従者の関係の境界線は明確に定められている。妻は夫の召使ではないのである。シェイクスピアの場合は、こうした夫―妻の関係と、主人―従者の関係をパラレルに描くことにより、後者が衣装の交換だけで主人と従者の立場を逆転することが可能であったように、前者の夫と妻の役割や関係性もまた、相対的な、演劇的構築物であることを明示している。

本研究の視座および成果は、平成２５年度から２７年度までの科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号 25370280）の研究課題「近代初期英国における寡婦・寡夫文学と若者文化との関連性についての歴史的研究」の研究に援用していく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 滝川　睦、「着衣と脱衣の詩学―Shakespeare 喜劇における―」、『名古屋大学文学部研究論集』、査読有、59 巻、2013、pp. 35-53

② 滝川　睦、「*Twelfth Night* における Viola のフィギュレンポジツィオン」、『名古屋大学文学部研究報告』、査読有、58 巻、2012、pp. 13-24

③ 滝川　睦、「国王のスペクタクルとマスターレス・マン―*Macbeth* における宴の場再考―」、査読有、57 巻、2011、pp. 1-14

〔学会発表〕（計　１件）

① 滝川　睦、「*Macbeth* における Banquet 再考」、第 49 回シェイクスピア学会、2010 年 10 月 16 日、福岡女学院大学

〔図書〕（計　１件）

①滝川　睦、他、彩流社、『境界線上の文学―名古屋大学英文学会 第５０回大会記念論集』、2013、pp. 31-46

６．研究組織

(1)研究代表者

滝川　睦（TAKIKAWA　MUTSUMU）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90179573

(2)研究分担者なし

(3)連携研究者なし